

Ⅱ. 調査結果の概要

II. 調査結果の概要

1. 男女平等意識について

(1) 男女の地位の平等に関する意識

“男性優遇※”の割合が特に高いのが、「社会通念、慣習、しきたり」(79.3%)、「政治の場」(73.7%)、「社会全体」(73.3%)の分野で、次いで、「職場」(55.5%)、「家庭生活」(55.1%)が5割前後で続く。

一方、“男女平等である”の割合は、「学校教育の場」(50.8%)が最も高く、以下、「地域活動の場」・「法律や制度上」、「家庭生活」が3割前後で続く。

なお、“女性優遇※”の割合は、いずれの分野でも1割未満と少ない。

※“男性優遇”とは、「男性が優遇されている」と「どちらかといえば男性が優遇されている」の割合の合計。“女性優遇”とは、「どちらかといえば女性が優遇されている」と「女性が優遇されている」の割合の合計。

男女別で見ると、「家庭生活」、「地域活動の場」、「法律や制度上」、「政治の場」、「社会全体」などは女性の“男性優遇”割合が男性を大きく上回り、一方、「地域活動の場」や「法律や制度上」、「政治の場」における“男女平等である”の割合が男性の方が大きい。

年代別でみると、“男性優遇”は全体的に中高年代の方の割合が高く、特に、「家庭生活」や「職場」、「地域活動の場」、「法律や制度上」、「社会全体」で顕著である。

「家庭生活」と「社会通念、慣習、しきたり」における、“男性優遇”の割合は全国と福島県を上回り、「地域活動の場」でも全国を上回る。

(2) 女性が職業を持つことについて

「子どもができて、ずっと職業を続けるほうが良い」(48.3%)が最も多く、次いで、「子どもができたなら職業をやめ、大きくなったら再び職業を持つほうが良い」(28.0%)で、回答はこの両者が大半を占める。

「子どもができて、ずっと職業を続けるほうが良い」は、性別や年代に関わらず一様に高い割合を示し、「子どもができたなら職業をやめ、大きくなったら再び職業を持つほうが良い」は、60代、70代以上の高年代での割合が特に多い。

(3) 女性がもっと増えたほうが良いと思う職業や役職

「国会議員、都道府県議会議員、市町村議会議員」(42.8%)をトップに、以下、「都道府県、市町村の首長」(31.0%)、「企業の管理職」(27.7%)、「医師・歯科医師」(27.2%)と続き、上位を占める。

性別でみると、「国会議員、都道府県議会議員、市町村議会議員」や「都道府県、市町村の首長」「企業の管理職」の割合は男女ともほぼ同じであるが、「医師・歯科医師」は女性が、「自治会長・町内会長」は男性がそれぞれ大きく上回る。

年代別では、「国会議員、都道府県議会議員、市町村議会議員」の場合、どの年代も4割以上と多く、「都道府県、市町村の首長」では30代～50代の中年代の割合が多い。

2. 家庭・結婚観、地域活動について

(1) 結婚、家庭、離婚に関する考え方

“賛成派※”の割合は、「結婚や出産後も女性が働き続けることは、自然なことであり、夫婦で協力して家事をするべきである」(86.5%)に続き、「男性も育休を積極的にとるべきである」(74.0%)、「結婚は個人の自由であるから、結婚してもしなくてもどちらでもよい」(65.9%)が上位にある。一方、“反対派※”の大きいのは、「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」(61.3%)で、また、“賛成派”と“反対派”に分かれているのが、「女性が仕事を持つのはよいが、家事・育児等と両立させるべきである」と「結婚しても必ずしも子どもを持つ必要はない」である。

※“賛成派”とは、「賛成(そう思う)」と「どちらかといえば賛成(そう思う)」の割合の合計。“反対派”とは、「反対(そう思わない)」と「どちらかといえば反対(そう思わない)」の割合の合計。

「結婚や出産後も女性が働き続けることは、自然なことであり、夫婦で協力して家事をするべきである」の“賛成派”は、女性の割合が男性を上回り、また、どの年代も一様に高い。

「男性も育休を積極的にとるべきである」では、女性と男性の割合はほぼ同じで、かつ10代、20代の若い年代で特に高く、「結婚は個人の自由であるから、結婚してもしなくてもどちらでもよい」では、女性の割合が男性を上回るとともに、10代～40代の若い年代ほど高い。

(2) 家庭における家事、育児や介護等の役割分担

“主に妻”の割合が、最も大きいのが「食事の用意」(70.6%)、次いで「洗濯」(66.2%)である。また、「あとかたづけ」と「掃除」も過半数を占める。

一方、“夫婦で”の割合が大きいのは、「地域の行事参加や近所とのつきあい」(31.0%)や「日常の買い物」(28.7%)、「子どもの世話や教育」(28.3%)であり、“主に夫”は、「地域の行事参加や近所とのつきあい」(20.6%)に多い。

“主に妻”とする割合が、男女で差があり、女性が男性を上回るのが「あとかたづけ」、「掃除」、「日常の買い物」、「家族の世話や介護」で、男女ともほぼ同じ割合にあるのが「食事の用意」と「洗濯」である。

年代別でみると、「食事の用意」では“主に妻”とする割合がどの年代でも高く、また、「洗濯」では50代以上の中高年代で、「日常の買い物」では、10代及び30代、40代の中年代に多い。

(3) 男性が家事、育児、介護、地域活動に積極的に参加していくために必要なこと

「夫婦や家族間でのコミュニケーションをよくはかること」(66.5%)が最も多く、以下、「男性が家事などに参加することに対する男性自身の抵抗感をなくすこと」(58.0%)、「労働時間短縮や休暇制度、テレワークなどを普及させ、仕事以外の時間をより多くもてるようにすること」(48.2%)、「社会の中で、男性の家事、育児、介護、地域活動などについても、その評価を高めること」(47.2%)が上位を占める。

「夫婦や家族間でのコミュニケーションをよくはかること」と「男性が家事などに参加することに対する男性自身の抵抗感をなくすこと」は、それぞれ女性の割合が男性を上回るとともに、10代と20代、50代の割合が特に高くなっている。

(4) 職業以外におこなっている活動

「特にない」(50.9%)が、ほぼ半数で最も多い。以下、「趣味、サークル、スポーツ等の活動」(29.0%)、「自治会、町内会の役員」(12.9%)が続き、「各種ボランティア、NPO」(5.8%)などこの他の活動は少ない。

男女別でみると、「特にない」と「趣味、サークル、スポーツ等の活動」は、男女ともほぼ同じ割合であるが、「自治会、町内会の役員」は、男性の割合が女性を大きく上回る。

年代別でみると、「趣味、サークル、スポーツ等の活動」は、10代と60代、70代以上の高年代で、「自治会、町内会の役員」は中高年代の割合が多い。

(5) 職業以外の活動に参加していない理由

「仕事が忙しく時間がないから」(26.2%)が最も多く、以下、「特に理由はない」(20.1%)、「健康に自信がないから」(12.9%)、「やりたい活動がないから」(10.6%)が続く。

また、その他の欄への記入では、「身体に障害有り・療養中」、「高齢のため」、「孫の面倒をみているため」等が多い。

性別でみると、「仕事が忙しく時間がないから」の割合は、男性が女性を大きく上回り、「特に理由はない」は女性と男性がほぼ同じ、「健康に自信がないから」や「介護の必要な家族がいるため」では、女性の方の割合が高い。

年代別では、「仕事が忙しく時間がないから」は、40代が最も多く、「特に理由はない」は若い年代に、「健康に自信がないから」は70代以上で特に多い。

3. 女性活躍の推進について

(1) 女性の活躍状況

“活躍派※”(60.0%)が“活躍していない派※”(34.0%)を26.0ポイントと大きく上回る。

〔※“活躍派”とは、「活躍している」と「どちらかといえば活躍している」の割合の合計、“活躍していない派”とは、「活躍していない」と「どちらかといえば活躍していない」の割合の合計。〕

性別でみると、“活躍派”の割合は、男性が女性を4.5ポイント上回るなど、男女での評価に差がある。

また、どの年代も、“活躍派”の割合が“活躍していない派”を上回るとともに、“活躍派”は10代～40代の若い年代で、“活躍していない派”は、60代、70代以上の高年代での割合が大きい。

(2) 活躍していると感じる理由

「管理職でないが活躍する女性が増えている」(53.6%)が過半数を占め圧倒的に多く、以下、「産休・育休などの支援制度が充実し、女性社員の退社が減っている」(27.9%)、「女性のキャリア意識が広がっている」(25.0%)が続く。

性別でみると、「管理職でないが活躍する女性が増えている」や「産休・育休などの支援制度が充実し、女性社員の退社が減っている」、「女性のキャリア意識が広がっている」の割合は、女性の方が男性より多い。

年代別では、「管理職でないが活躍する女性が増えている」は、10代と20代(60.9%)及び40代(63.6%)と50代で特に多く、「産休・育休などの支援制度が充実し、女性社員の退社が減っている」は、30代～50代の子育て世代に多い。

(3) 活躍していないと感じる理由

「男性優位の考え方が変わっていない」(39.0%)をトップに、「出産・育児などのため、男性に比べキャリア形成が難しい」(31.1%)、「女性の職域が限定的である」(28.2%)が上位を占める。

性別でみると、「男性優位の考え方が変わっていない」と「出産・育児などのため、男性に比べキャリア形成が難しい」は、女性の割合が男性よりやや多いが、「女性の職域が限定的である」と「女性の経営者や管理職が少ない」、「女性のキャリア意識が向上していない」では、男性が女性を大きく上回る。

年代別では、「男性優位の考え方が変わっていない」は、20代が最も多く、50代と60代(43.2%)がこれに続く。また、「出産・育児などのため、男性に比べキャリア形成が難しい」は、10代(50.0%)、20代(57.1%)の若い年代で特に高い。

(4) 女性の活躍に必要なこと

「女性の育児・介護等との両立について職場の支援制度が整っていること」(49.2%)が最も多く、以下、「職場の上司・同僚が、女性が働くことについて理解があること」(38.9%)、「保育施設、保育サービスが充実していること」(36.9%)が続く。

性別でみると、「女性の育児・介護等との両立について職場の支援制度が整っていること」をはじめ、「職場の上司・同僚が、女性が働くことについて理解があること」、「保育施設、保育サービスが充実していること」、「男性が家事・育児に参加すること」は、いずれも女性の割合が

男性より多い。

年代別では、「女性の育児・介護等との両立について職場の支援制度が整っていること」とする割合は、70代以上を除く全ての年代で5割台と高く、また、「職場の上司・同僚が、女性が働くことについて理解があること」は、どの世代も3割～4割を占める。

4. 職業・就労について

(1) 仕事と生活についての考え方(理想)と現実(現状)

「考え方(理想)」は、「仕事」と「家庭生活」と「地域・個人生活」を全てバランス良く行う(32.1%)と「仕事」と「家庭生活」をともに両立(29.6%)に集中している。

一方、「現実(現状)」では、「仕事」を優先(35.7%)が最も多く、次いで「仕事」と「家庭生活」をともに両立(15.5%)、「家庭生活」を優先(15.2%)が続く。

○考え方(理想)

男女別でみると、「仕事」と「家庭生活」と「地域・個人生活」を全てバランス良く行う」と「仕事」と「家庭生活」をともに両立の割合は、男女でほとんど差はない。

年代別では、「仕事」と「家庭生活」と「地域・個人生活」を全てバランス良く行う」は、40代～60代の中年代の割合が多く、「仕事」と「家庭生活」をともに両立」は、10代～30代の若い年代の割合が高い。

○現実(現状)

性別でみると、「仕事」を優先の割合は、男性(48.0%)が女性(26.4%)を大きく21.6ポイント上回り、「家庭生活」を優先は、女性(21.3%)が男性(8.3%)を13.0ポイント上回る。また、「仕事」と「家庭生活」をともに両立」は、女性と男性がほぼ同じである。

年代別では、「仕事」を優先の割合は、40代(46.5%)、20代(43.3%)、50代(42.2%)が高く、「家庭生活」を優先は、30代(27.3%)が特に多い。また、「仕事」と「家庭生活」をともに両立」は、20代と40代、50代が約2割を占める。

(2) 仕事や待遇面での男女差別

「そのようなことはないと思う」が36.9%で最も多く、「女性が差別されていると思う」が12.5%、「男性が差別されていると思う」は2.4%と少ない。

性別でみると、「そのようなことはないと思う」の割合は、男性(40.6%)が女性(34.6%)を6.0ポイント上回り、「女性が差別されていると思う」も、わずかであるが男性の方が多い。

年代別では、「そのようなことはないと思う」は、20代～50代の各年代で5割を占め「女性が差別されていると思う」は、20代(21.7%)と40代に多い。

(3) 男女差別の具体的内容

「賃金に差がある」(49.7%)と「昇進、昇格に差別がある」(47.1%)が、ともに回答者の5割近く占め、また、「能力を正当に評価しない」と「結婚したり、子どもが生まれたりすると仕事を続けにくい雰囲気がある」は3割台である。

性別で見ると、「賃金に差がある」と「能力を正当に評価しない」、「結婚したり、子どもが生まれたりすると仕事を続けにくい雰囲気がある」は、いずれも女性の割合が男性より多いが、「昇進、昇格に差別がある」は、男性(57.1%)が女性(37.3%)を19.8ポイントと大きく上回る。

年代別で見ると、「賃金に差がある」は、50代～70代以上の中高年代の割合が高く、「昇進、昇格に差別がある」は、40代と50代の割合が特に高い。

(4) 女性が働き続けるために必要なこと

「労働時間の短縮や休日の増加、就業時間に柔軟性を持たせるなど、働きやすい労働環境とする」(40.8%)が最も多く、以下、「賃金、仕事内容など、労働条件面での男女差をなくす」(29.1%)、「育児・介護のための休業制度、諸手当を充実する」(28.9%)、「パート、派遣労働等の労働条件を改善する」(25.1%)などが続く。

性別で見ると、「労働時間の短縮や休日の増加、就業時間に柔軟性を持たせるなど、働きやすい労働環境とする」は、女性と男性の割合がほぼ同じであるが、「家事、育児、介護は女性がするもの」という社会の意識を改める」は女性の方が、「賃金、仕事内容など、労働条件面での男女差をなくす」は男性の方が多い。

年代別では、「労働時間の短縮や休日の増加、就業時間に柔軟性を持たせるなど、働きやすい労働環境とする」の割合は、20代(55.0%)や30代(46.5%)、50代(46.1%)が多い。

5. 子どもの教育について

(1) 子どもに受けさせたい教育程度

“男の子”の場合は、「大学」が67.6%と圧倒的に多く、以下、「各種学校・専修学校」の6.6%、「大学院」の6.0%、「高等学校」の5.4%の順。“女の子”では、「大学」が59.5%に続いて「各種学校・専修学校」の9.9%、「短期大学」の7.8%、「高等学校」の5.8%の順となっている。

○男の子

「大学」とする割合は、女性(68.9%)と男性(68.1%)がほぼ同じ割合であり、また、20代(80.0%)が最も多く、次いで30代～70代以上の各年代でも7割前後と高い。

○女の子

「大学」は、女性(61.1%)が男性(59.8%)より多く、「各種学校・専修学校」は、女性(11.3%)が男性(7.9%)を3.4ポイント上回る。

「大学」は、20代(73.3%)や50代(67.2%)で高く、「各種学校・専修学校」は、30代(14.1%)と40代(11.3%)の中年代が多い。

(2) 子どもに対する人権や男女平等等の意識の育成

「学校における、進路指導や職業教育について、男女を問わず、子ども自身の希望と能力を重視する」(60.0%)が最も多く、以下、「学校における、学級活動や児童会・生徒会活動、クラブ活動等の役割分担について、男女を問わず、子ども自身の希望と能力を重視する」(55.6%)、「学校において、人権や男女平等に関する授業を行なう」(41.5%)等が上位を占める。

性別でみると、「学校における、進路指導や職業教育について、男女を問わず、子ども自身の希望と能力を重視する」と「学校における、学級活動や児童会・生徒会活動、クラブ活動等の役割分担について、男女を問わず、子ども自身の希望と能力を重視する」は、ともに女性と男性の割合が同じである。

年代別では、「学校における、進路指導や職業教育について、男女を問わず、子ども自身の希望と能力を重視する」の場合、20代をはじめ、30代～60代の割合が高い。

6. 介護について

(1) 家族の介護に対する考え

“考え方(理想)”では、「ホームヘルパーやディサービス等の福祉サービスを利用しながら主に自宅で介護している(したい)」(39.7%)と「特別養護老人ホーム等の施設へ入所し、介護サービスを利用している(したい)」(37.2%)に分かれ、“現実(現状)”では、「ホームヘルパーやディサービス等の福祉サービスを利用しながら主に自宅で介護している(したい)」(30.5%)が、「特別養護老人ホーム等の施設へ入所し、介護サービスを利用している(したい)」(20.9%)を上回る。

○考え方(理想)

性別でみると、「ホームヘルパーやディサービス等の福祉サービスを利用しながら主に自宅で介護している(したい)」と「特別養護老人ホーム等の施設へ入所し、介護サービスを利用している(したい)」の割合は、女性が男性をやや上回る。

年代別では、「特別養護老人ホーム等の施設へ入所し、介護サービスを利用している(したい)」は、30代～60代の各年代とも4割台を占め、「ホームヘルパーやディサービス等の福祉サービスを利用しながら主に自宅で介護している(したい)」は、20代(43.3%)をトップに、60代、70代以上の高年代が多い。

○現実(現状)

性別でみると、「ホームヘルパーやディサービス等の福祉サービスを利用しながら主に自宅で介護している(したい)」と「特別養護老人ホーム等の施設へ入所し、介護サービスを利用している(したい)」の割合は、女性と男性でほぼ同じである。

年代別では、「ホームヘルパーやディサービス等の福祉サービスを利用しながら主に自宅で介

護している（したい）」は50代（37.2%）と60代（38.3%）が、「特別養護老人ホーム等の施設へ入所し、介護サービスを利用している（したい）」は、60代（26.0%）が最も多い。

（2）自宅での介護の場合の主たる担当者

「主に、自分が介護すると思う（している）」（43.2%）が最も多く、次いで「主に、自分の配偶者が介護すると思う（している）」（20.2%）が続く。

性別で見ると、「主に、自分が介護すると思う（している）」は女性（59.1%）が特に高く、「主に、自分の配偶者が介護すると思う（している）」は男性（40.0%）に多い。

年代別では、「主に、自分が介護すると思う（している）」は、50代（55.6%）、40代（45.8%）に多く、「主に、自分の配偶者が介護すると思う（している）」は、60代（28.6%）、70代以上（24.4%）の高年代に多い。

7. 人権について

（1）人権に関する言葉と意味の認知度

「言葉も意味も知っている」とする割合は、レズビアン（87.4%）とゲイ（88.5%）が特に高く、以下、カミングアウト（62.9%）、バイセクシュアル（57.5%）が続く。

「言葉は知っているが、意味は知らない」は、セクシュアル・マイノリティ（24.9%）、トランスジェンダー（21.2%）が多い。

一方、「知らない」とする割合は、SOGI（81.2%）とアウティング（74.0%）が圧倒的に多い。

（2）人権侵害に関する認識と被害状況

「自分が受けた」は、パワハラ（15.4%）が最も多く、次いでモラハラ（9.6%）、セクハラ（8.6%）と続く。

「身近で見聞きした」は、パワハラ（32.3%）が最も多く、以下、セクハラ（25.0%）、モラハラ（21.7%）、DV（20.6%）、ストーカー（20.1%）などが多い。

「マスコミ等で聞いたことがある」は、ストーカー（65.0%）、マタハラ（63.7%）、DV（62.2%）の割合が高く、また、セクシャル・マイノリティ（56.3%）、セクハラ（54.2%）、モラハラ（50.9%）も過半数を占め多い。

（3）人権侵害を受けた方の相談状況

「相談した」が11.9%で、「どこ（誰）にも相談しなかった」が12.7%である。

性別で見ると、「相談した」は、女性（14.8%）が男性（7.4%）を上回り、「どこ（誰）にも相談しなかった」も同様、女性（14.3%）が男性（11.3%）を上回る。

年代別では、「相談した」は、20代（20.0%）や40代（21.1%）が最も多く、また、「どこ（誰）にも相談しなかった」は、40代と50代（ともに18.3%）に多い。

(4) どこ（誰）にも相談しなかった理由

「相談しても無駄だと思ったから」(56.8%)が圧倒的に多く、次いで「自分さえ我慢すればいいと思ったから」(28.0%)、「相談するほどのことではないと思ったから」(25.8%)が続く。

性別でみると、「相談しても無駄だと思ったから」は、男性(61.2%)が女性(54.9%)を上回り、一方、「自分さえ我慢すればいいと思ったから」と「相談するほどのことではないと思ったから」は、ともに女性の割合の方がわずかに多い。

年代別では、「相談しても無駄だと思ったから」は、30代(68.8%)、40代(61.5%)が特に高く、「自分さえ我慢すればいいと思ったから」は60代(35.7%)、「相談するほどのことではないと思ったから」は、40代(38.5%)が最も多い。

(5) 性的少数者が感じていると思われる問題

「学校や職場でいじめにあう可能性があること」(56.2%)と「セクシュアリティを明かせないことで、精神的負担を被ること」(52.5%)が上位にある。「就職、職場で不利な扱いを受けること」(46.7%)や「じろじろ見られたり、避けられたりすること」(41.5%)の割合も多い。

性別でみると、「学校や職場でいじめにあう可能性があること」と「セクシュアリティを明かせないことで、精神的負担を被ること」などは、女性の割合が男性を上回り、「就職、職場で不利な扱いを受けること」と「じろじろ見られたり、避けられたりすること」は、女性と男性の割合がほぼ同じである。

年代別では、「学校や職場でいじめにあう可能性があること」は、10代(88.2%)をはじめ、20代(76.7%)、30代(66.7%)と若い年代の割合が高く、また、「セクシュアリティを明かせないことで、精神的負担を被ること」では、10代(76.5%)、40代(69.0%)、20代(68.3%)が多い。

(6) 男性、女性に関する考えや気持ち

“そう思う派※”は、「同性を好きになることも性の多様性として認めるべきである」(64.7%)、「女性には男性のような服装をする自由がある」(62.5%)、「男の子は男らしく、女の子は女らしく育てるべきだ」(60.2%)の割合が特に高く、“そう思わない派※”は、「男性のような女性には違和感がある」(57.7%)、「女性が女性に恋愛感情を抱くのはおかしい」(54.2%)、「男性が男性に恋愛感情を抱くのはおかしい」(51.4%)が上位にある。

〔※ “そう思う派”とは、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の割合の合計、“そう思わない派”とは、「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」の割合の合計。〕

「同性を好きになることも性の多様性として認めるべきである」の場合、“そう思う派”は、女性(70.8%)が男性(57.0%)を13.8ポイント、“そう思わない派”は、男性(37.2%)が女性(22.7%)を14.5ポイントとそれぞれ大きく上回る。また、“そう思う派”は、10代~40代の若い年代の割合が高く、“そう思わない派”は、70代以上(50.8%)が最も多い。

一方、「男性のような女性には違和感がある」の場合、“そう思う派”は、男性(44.4%)が

女性（29.3%）を15.1ポイント、“そう思わない派”は、女性（64.3%）が男性（50.1%）を14.2ポイントそれぞれ大きく上回り、また、“そう思う派”は、60代、70代以上の高年代に多く、“そう思わない派”は、10代が最も多い。

8. 防災について

（1）防災における男女共同参画について

「男女がともに安心して利用できる避難所運営マニュアルの作成」（59.2%）が最も多く、次いで「福島市地域防災計画に、性別や年齢等に関わらず多様な市民の意見を反映させる」（47.0%）が続く。また、「防災に関する学習機会の提供」や「防災関係者に対する男女共同参画の意識づくり」、「災害時における女性の相談体制の整備」においても、いずれも3割前後の割合と多い。

性別で見ると、「男女がともに安心して利用できる避難所運営マニュアルの作成」は、女性（62.3%）が男性（55.9%）より多く、「福島市地域防災計画に、性別や年齢等に関わらず多様な市民の意見を反映させる」では、男性（49.9%）が女性（45.7%）を上回る。

年代別では、「男女がともに安心して利用できる避難所運営マニュアルの作成」は、10代（70.6%）の割合が最も高いが、他のいずれの年代も5割～6割と多い。また、「福島市地域防災計画に、性別や年齢等に関わらず多様な市民の意見を反映させる」は、70代以上（55.9%）をはじめ、中高年代の割合が高い。

9. 男女共同参画に関する施策について

（1）男女共同参画を進めるために力を入れるべきこと

「労働時間の短縮や保育・介護サービスの充実など、男女ともに働きやすい環境を整える」（62.0%）が最も多く、次いで「子育てや介護などで一度仕事を辞めた人への再就職を支援する」（47.3%）である。

性別で見ると、「労働時間の短縮や保育・介護サービスの充実など、男女ともに働きやすい環境を整える」は、女性（66.3%）が男性（58.4%）を7.9ポイント上回り、「子育てや介護などで一度仕事を辞めた人への再就職を支援する」では、男性（50.1%）が女性（46.4%）より多い。

年代別では、「労働時間の短縮や保育・介護サービスの充実など、男女ともに働きやすい環境を整える」は、20代（75.0%）をはじめ、30代～60代の割合も6割台と高く、「子育てや介護などで一度仕事を辞めた人への再就職を支援する」は、10代（82.4%）の割合が特に高い。

（2）福島市の男女共同参画推進の取り組みに対する認知度

“内容までよく知っている”は、「男女共同参画について」でわずか4.2%であり、その他はさらに少ない。また、“聞いたことはある”は、「男女共同参画について」（48.8%）が最も多く、以下、「福島市男女共生セミナーなどの講座の開催」（29.4%）、「福島市男女共同参画推進条例」（26.6%）が続く。

一方、「知らない」は、「おとう飯」と「男女共同参画情報紙（さんかく B o o k）」が8割以上と高い。

「男女共同参画について」の場合、「内容までよく知っている」と「聞いたことはある」は、ともに女性と男性の割合はほぼ同じであり、「内容までよく知っている」は、10代（29.4%）と20代（13.3%）の若い年代の割合が高い。また、「聞いたことはある」は、10代をはじめ、50代～70代以上の中高年代で過半数を占める。

「福島市男女共生セミナーなどの講座の開催」の場合は、「内容までよく知っている」は、女性、男性（ともに1.8%）の割合は同じで、「聞いたことはある」は、女性（33.0%）が男性（24.9%）を上回る。

また、「内容までよく知っている」は、30代、50代、60代で3%ほど見られるが、10代、20代ではゼロである。また、「聞いたことはある」は、50代（35.6%）、60代（33.9%）が他の年代を上回る。「知らない」は、20代（78.3%）を中心に若い年代の割合が高く、60代（56.4%）が最も低い。

（3）男女共同参画センターへの認知度等

「利用したことがある」は5.3%、「知っているが、利用したことはない」が31.8%で、「知らない」が57.4%と多い。

性別で見ると、「利用したことがある」と「知っているが、利用したことはない」は、両方とも女性の割合が男性より多く、「利用したことがある」は、50代～70代以上の中高年代に多い。

（4）「ウイズ・もとまち」充実への要望

「相談機能」（37.3%）をトップに、「セミナーや講座の充実」（34.7%）、「市民団体の交流、活動機能」（30.9%）、「図書・情報収集、提供」（25.1%）の順となっている。

性別で見ると、「相談機能」は女性（39.3%）が男性（34.6%）を上回り、「セミナーや講座の充実」も、女性（36.8%）が男性（32.3%）より多い。

一方、「市民団体の交流、活動機能」と「図書・情報収集、提供」では、女性と男性がほぼ同じ割合である。

年代別では、「相談機能」は20代（48.3%）の割合が最も多く、以下、40代（41.5%）、10代（41.2%）と続く。また、「セミナーや講座の充実」は50代（44.4%）と60代（39.6%）で多く、「市民団体の交流、活動機能」は10代（35.3%）、「図書・情報収集、提供」では30代（35.4%）や40代（32.4%）の割合が多い。